椙山女学園大学研究論集　第46号（社会科学篇）2015

# オーストラリアの小学校における図画工作の授業の実態と課題

## ――シドニー市の公立小学校での参与観察から――

山　田　真　紀*・森　　文　乃*

Investigation on the actual conditions of visual arts lessons in primary schools in Australia: observation of two public schools in Sydney, NSW

Maki YAMADA and Ayano MORI

### はじめに

私たちは，日本の学校教育における「図画工作」「美術科教育」，そこへつながる幼稚園・保育園での「造形表現」に関心を持ち，これらに類する内容が諸外国の就学前教育や学校教育において実施されているのか，実施されているとするならば，どのような目的と内容を持って実施されているのかに興味を抱いてきた。そこで，オーストラリアを対象国とし，日豪比較研究を行うことにした。オーストラリアを選んだ理由は，現在のところ日本ではオーストラリアの造形領域に関する研究が皆無であるため，研究の間隙を埋めることができること，オーストラリアは日本の学習指導要領にあたる国家カリキュラムを持つこと，日本の夏期休暇中に南半球のオーストラリアでは授業を行っており，使用言語が英語であることから，参与観察が比較的容易であることなどによる。私たちは，就学前教育から小学校までを関心の対象とすることから，日本で用いられる「造形表現」「図画工作」，オーストラリアを初めとする英語圏でよく用いられるヴィジュアルアーツ（Visual arts）を総称する言葉として，ここでは便宜的に「造形領域」を用いることとしたい。

私たちは，まず，就学前教育においては，日本の「保育所保育指針[1)]」「幼稚園教育要領[2)]」とオーストラリアの「幼児期の学習要領（Belonging, Being & Becoming: The Early Years Learning Framework）[3)]」を比較し，小学校段階においては，日本の学習指導要領[4)]と，オーストラリアの「カリキュラムの構造：芸術領域（Shape of the Australian Curriculum: The Arts）[5)]」を比較し，カリキュラムにおける造形領域の位置づけ，目的，内容，方法の共通性や差異について分析した。その成果は，森・山田「造形領域における日本とオーストラリアの学習指導要領の比較―幼児期と学童期に着目して―」にまとめている[6)]。

さらに私たちは，2014年8月にオーストラリアのシドニー市を訪れ，2つの公立小学校でヴィジュアルアーツの授業を見学させてもらうことにした。授業見学では，国家カリ

* 教育学部　子ども発達学科

キュラムの内容が教師によってどのように翻訳され，実際の授業としてどのように展開されているかを見ることができた。見学した2つの授業は，研究授業として，あるいはヴィジュアルアーツを専門とするベテラン教師によって準備された「特別な授業」ではなく，「普通」の教員が日常的に行っている授業である。この2つの授業を，オーストラリアのヴィジュアルアーツの授業として一般化することはできないが，実際に展開されている授業のサンプルとして紹介することに意義があるだろうと考えた。本稿では，その実態を紹介するとともに，その特徴と課題について考察していきたい。

## 1.「造形」領域の国家カリキュラムの日豪比較

### ⑴ 国際比較研究から見えてくるもの

教科としての造形領域の国際比較研究は，さまざまな国を対象に行われてきた。管見の限りではあるが，少なくともアメリカ・イギリス・ドイツ・韓国・台湾における造形領域の国家カリキュラムの比較研究, および教育実践の比較研究が行われてきたようである[7)]。それぞれの研究は，独自の問題意識によって展開されているため，また紙幅の関係もありここではひとつひとつの知見を紹介することはしないが，先行研究を紐解くことにより，造形領域の教科が各国において共通して抱えている課題を知ることができる。1つ目は，国家カリキュラムを持つかどうか，もつ場合，「社会的な強制力をもって教育実践に規範をもたらす“制度としてのカリキュラム”」と，子ども達の実態に即し，子ども達との相互作用を通して教師が現場で構築していく“創造的なカリキュラム”には，どのようなギャップがあるかということである[8)]。2つ目は，子どもの感性や創造性を重視する“子ども中心主義的な教育観”と，美術科というディシプリンの成立を目指す“教科中心主義的な教育観”との間で，各国の造形領域の教科がどこに位置づくか，ということである。この点については，アメリカの状況を伝えるふじえは，アメリカでは「美術教育を学校教育での〈飾り〉ではなく，数学や理科とならぶ学問的教科へと脱皮させようとする意図」があり，「従来の自己表現中心主義から，鑑賞活動を含めて，美術に関する活動を総合的に学習する教科としての方策が模索された」現状を報告している[9)]。3つ目は，造形領域の科目が，子ども達の何を育て，それが社会にどう役立つかの意義付けの問題である。社会的意義については，自国の文化や他国の文化を知る，すなわち国際理解教育と郷土教育としての意義や，自分たちの生活環境をよりよくデザインすることのできる力を身に付けさせる意義などが示されている。この点については，イギリスの状況を伝える阿部が，イングランドの美術教育は「活動を通して，価値ある判断と美的で実際的な決定をすることを学び，環境を形づくることに意欲的に参加する」ようになることを目指していることを伝えており[10)]，教科の社会的貢献のひとつの在り方を示している。

このような文脈のなかに，日本の図画工作や美術科を位置づけてみると，日本がこれまで大切にしてきたことやその特徴が浮き彫りになるとともに，日本の在り方とは異なった多様なオルタナティブの存在を知ることになる。これこそが国際比較研究の意義であろう。

### ⑵「造形」領域の国家カリキュラムの日豪比較の概要

造形領域の国家カリキュラムの日豪比較については，森・山田による前掲論文に詳しい

が，ここでは重要な相違点について概略を紹介し，のちに紹介する授業の解釈に役立てていきたい。重要なポイントは3点ある。

第1に，造形領域の制度的な位置づけの違いである。日本では図画工作は教科のひとつに位置づけられているが，オーストラリアではヴィジュアルアーツは，カリキュラムを構成する「芸術」のなかの1領域である。「芸術」はダンス・演劇・メディアアート・音楽・ヴィジュアルアーツの5領域からなっている。配当時間は，日本では年間約70時間（週に2時間）であるのに対し，オーストラリアでは，5領域を含めて，準備級～2年生で120時間，3～4年生で100時間，5～6年生で100時間と規定されており，どの領域をどの程度，重点的に扱うかは各学校に任されているものの，多くの学校で週1時間とされており，日本の約半分である。日本の図画工作には教科書があるが，オーストラリアでは教科によらず日本の検定教科書にあたるテキストはなく，何をどのように扱うかについては教師の裁量権が大きい。

第2に，造形領域の目的の違いである。日本の図画工作は，造形芸術の知識・技術を学ぶことを目的とするだけでなく，「感覚や気持ちを生かしながら楽しくつくること[11)]」「感じたことや想像したことから，表したいことを見付けて表すこと[12)]」という学習指導要領上の文言からも分かるように，図画工作を通して，感性を豊かにしたり，創造性を高めたりすることも大切にされている。すなわち，日本の図画工作はそれ自体が目的であるだけでなく，人間性教育の手段としても位置づいている。一方，オーストラリアでは，造形芸術の知識・技術を学ぶことが目的とされ，人間形成における「手段的」な記述は皆無である。

第3に，一方で，オーストラリアでは，ヴィジュアルアーツを通して「文化を知る」ことが重視されている。伝統文化・大衆文化・他国の文化を知るための手段であり，特に，オーストラリアの原住民族であるアボリジニ・トレス海峡島嶼民の文化を知ること，また地理的にも経済的にも強い結びつきのあるアジアの文化を知ることが重視されている[13)]。

## 2. 公立小学校で実施されているヴィジュアルアーツ授業の実際

私たちは，シドニー市内の南西部にあるM地区にある2つの小学校でヴィジュアルアーツの授業を参観することができた。A小学校は児童数約600名で，約半数の児童が英語以外の言語的バックグラウンドを持つ多文化状況にある小学校である。B小学校は創立100年以上の伝統ある小学校であり，児童数約270名で，やはり半数以上の児童が英語以外の言語的バックグラウンドを持つ多文化状況にある小学校である。授業見学は本稿執筆者のふたりと磯部錦司氏（椙山女学園大学教育学部教授）の3人で行った。

### (1) A小学校におけるヴィジュアルアーツの授業

日時：8月22日（金）14時～15時
場所：A小学校　2・3年生混合クラス
教科：Visual Arts（図画工作）
教師：非常勤講師Casual teacher[14)]　20代前後半～30代前半の女性教諭

**写真1**　Dragonfly（原題は「the heart and soul of outback Australia」）

14時：授業開始

電子黒板にトンボの絵が映し出される。これはプロ・ハートPro Hartというオーストラリアで最も有名な芸術家が描いた代表的作品である（写真1）。

先生は児童に前の時間に使った教材をロッカーのなかにしまうように指示する。

先生は，今朝，スポンジペインティングで茶色に着色し，乾燥させたA4サイズの紙をランダムに児童に配っていく。裏に名前を書くように指示する。この茶色の紙は，1枚，1色であるが，スポンジによる濃淡があり美しい紙に仕上がっている。茶色の色調は明るいものと暗いものの2種類がある。先生は見本の紙を掲げ，「土っぽい色ですね」という。

先生は，電子黒板の絵に注目させ，まず作品の色調について，「very earthy（土のような色ですね）」と表現する。何の絵なのか児童に問いかける。児童は挙手して「トンボの絵」「トンボがアリに食べられている」と答える。先生は「トンボがアリを食べているのですね」という[15)]。

先生はトンボやアリについてよく観察するように指示する。

先生：「翅が4枚すべて上向きに描かれていますね，通常は横向きなのに。これはこのアーティストの特徴です。」

先生：「足は何本ありますか？」　児童：「6本です。」

先生：「翅は何枚ありますか？」　児童：「4枚です。」

先生：「触角は何本ですか？」　児童：「2本です。」

先生：「なんでしっぽがこんな風に曲がっているの？」

児童：「しっぽが長すぎて紙に入りきらないから。」

先生：「それでは，形を注意深く，よく見て，みんなもトンボとアリの絵を描いてみましょう。影のことは考えなくても大丈夫です。あとからクレヨンで色を付けていきます。ステップごとに進んでいきます。（教室がざわつく）。先生の話を聞く時には，おしゃべりをしないで，目を見て聞いてください。まず，鉛筆を使ってアウトライン

を描きます。紙のスペースをどう使うかがとても大切です。最初によく考えて描き出しましょう。」

先生は，ホワイトボードを紙に見立てて，模範を示す（写真5）。

先生：「小さなトンボを描こうとはしていないので，紙全体にトンボが描けるように。このように余白を少し残してから頭を描くといいですね。触角はもう少し長い方がいいかな……。（まず頭と目と触角を描く）。次に，体はいくつのパートに分かれていますか？」

児童：「7つ。」

先生：「そうですね。まず頭の隣に長方形を描きます。長方形といっても，つながっているところは少し丸く。そしてこの長方形をつなげていって……。」

児童：「いくつ？」

先生：「今のところは，3つ。しっぽの最後の方は曲がっています。こんな風に。」

児童は先生の見本を参考にしながら，鉛筆でアウトラインを描いていく。

先生：「みんなひとりひとり，違う見た目で大丈夫ですよ。全員同じように描こうとしているわけではなく，今はトンボをどのように描くか学んでいるだけですから。」

先生：「さあ，次に翅を描きますよ。（児童は，やった！というジェスチャーをする）。最初の翅は最初の節から出ていますね。こんな感じかな。（先生の見本は，ひとつの節にひとつの翅が生えてしまっており，プロ・ハートの絵とは異なってしまっている。）さあ，次に足を描きますよ。足の曲がり方もよく見て描きます。」

先生はここまで説明すると，先生は机間巡視をする。児童は先生が回ってくると途中経過を見せる。ある児童には「Very similar（とてもよく似ているわ）」というコメントをする。また，うまく描けなくて悩んでいる児童がいるので，「いろいろと違っていてもいいんですよ」と声をかける。ある程度，進んだところを見計らって，先生は次の指示を与える。

先生：「上手にアリが描ける人はいますか？」（多くの児童が挙手する。）

先生：「どのくらいのサイズにアリを描けばいいか，トンボと大きさをよく比べて描きましょう。」

手をあげている女子児童を指名して，ホワイトボードに見本を描かせる。始めは大きく描きすぎ，一度，消す。そして次にはちょっと小さく描きすぎてしまう。「自分も描きたい」と4～5名の児童がまだ手をあげている。

先生：「はい，ありがとう。これは上から見たものですね。近くにいるモノは少し大きめに描くといいのよ。」

教室が騒がしくなったので，先生は，「おしゃべりしすぎです！　Too much talking! 」と注意する。そして,「肩」「頭」「肩」「ひざ」というと, 児童はその部位を両手で押さえて, 私語がやむ。（児童の集中を再獲得するための戦略のひとつである。）

先生：「アリは体が3つに分かれていますね。足は2番目の節から3本ずつ出ているのよ。」

先生は白板に立体的にアリを1匹描く。プロ・ハートのアリとは全く異なる。

先生：「私は横から見たアリを描いてみました。アリも周りに描いてくださいね。」

ここでしばらく机間巡視。下描きができた児童が数人出てくると……

先生：「鉛筆で下描きができたら，今度はクレヨンで色を付けます。翅や目は白のような明るい色がいいですね。紙が茶色なので，茶色や暗い色は目立ちません。オレンジ

や黄色が目立ってよいと思います。まずは黒いペンやクレヨンで，アウトラインを縁取りしてから，色を付けていきましょう。色は赤とか緑とか，好きな色を使っていいですよ。」

児童はロッカーに自分の黒いペンを取りにいく。アウトラインを黒で縁取りし始める子もいれば，クレヨンでまず色を塗り始める子もいる。

しばらくすると，先生がひとりの児童の作品を全体に見せ，「こんな風にアウトラインをなぞってから色を付けます」という。そして白で翅を塗ったものを取り上げ，全体に見せながら「これはクレヨンから先に塗り始めたバージョンですね。ほら，暗い背景に白がとても生えますね。黄色，オレンジ，明るい緑など，明るい色を使うとよいでしょう」という。

児童は，まずアウトラインを縁取りしてから，周囲にペンでたくさんのアリを描いていく。上からクレヨンで強く塗りすぎて，黒いアウトラインが消えてしまう作品が数点出てくると，先生は「アウトラインが消えてしまいましたね。もう一度，上からトレースしてください」と指示する。そしてトレースし直した子どの作品を見て，「よくなったわLooks better」という。

児童はざわざわと感想を言い合いながら，作業をしている。クレヨンを選びに教卓まで出てくる児童もいる。机間巡視をしている先生を呼び止めて，「こんな感じでいいですか？」と自分の作品がうまく進んでいるか確認する児童も多数いる。先生は，「うるさすぎますよ Too noisy」とおしゃべりを制しながら，机間巡視をする。先生は「アウトラインは大切ですよ。消えてしまわないように。消えてしまったら上からトレースし直してね」と念を押している。翅と胴体を切り離して描いている児童に，「翅の下の方も塗って胴体とくっつけると，翅らしくていいわね」とアドバイスをする。またどの色を使えばいいのか相談しに来た児童に，「明るい色なら何でも大丈夫……この辺の色はどうかな」と数色提案し，全員に向かって「トンボは何色に塗ってもいいですよ」という指示を出す。そのため，節ごとに色を変え，レインボー色のトンボに仕上げている児童もいる。

14時40分：

数人の児童の絵が仕上がる。先生はそのなかの2枚を取り上げ，「こんな風にできました」「こんな風にみんな違うできあがりだけど，みんな素晴らしい作品になっていますね」とクラスの子どもに紹介し，見た目が違っても大丈夫ということを知らせる（写真6・7）。そのうちの1枚をホワイトボードに立てかけておく。子どもは作品ができあがると先生に見せにいく。先生はいずれの作品に対しても「とってもいいわ」とポジティブなフィードバックをする。また，「使い終わったクレヨンは元の場所に戻してくださいね」という指示を出す。7割の子どもは落ち着いて自分の作品に向かっているが，3割の子どもは落ち着かない。立ち歩いたり，おしゃべりをしたりして，あまり作業が進んでいない児童もいる。4本足のアリを大量に書いている児童（写真2），3つの節から1対ずつの足が生えたアリを大量に描いている児童（写真3），2つの節から1対ずつの足が生えた4本足のアリを書いている児童（写真4）もいる。

14時50分：

できあがった作品を隣の部屋に持っていき，仕上げの作業について説明する。仕上げは赤と紫の薄く溶いたインクを作品の上からぽたぽたとたらし，作品にニュアンスを出すとい

**写真2**　作業風景①（4本足のアリ）

**写真3**　作業風景②（節から2本ずつの足）

**写真4**　作業風景③（二つの節に4本足）

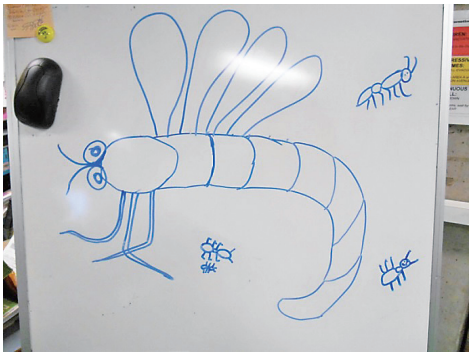

**写真5**　先生の描いた見本

**写真6**　完成作品①

**写真7**　完成作品②

うものである。先生と一緒に3人の児童が仕上げの作業をする。先生はすぐに教室に戻る。先生は「100％できたら先生に出してくださいね。作品が仕上がった子は後片付けをして，本を読んで静かに待っていてくださいね」と指示を出す。終わった児童は片付けをして，本を出して読み始める。次々に先生に作品が手渡される。先生は「素晴らしい！　Great!

」「ありがとうね！　Thank you! 」「いいわね！　That's nice! 」などそれぞれにポジティブなフィードバックを与えているが，具体的にどこがどのようによいのかについては言及していない。時折，「カラフルでいいね」とその絵の特徴に言及していた。

14時55分：

電子黒板からトンボの絵が消え，児童の名前が記された別の画面が映し出される。児童の名前をタップすると，その児童に点数が加算される仕組みである。先生の指示に従い，きちんと本を読んで待っている児童の名前を呼び，「彼のしていることが，今，すべきことです」といい，その児童の名前をタップする。先生は「作品を仕上げて，早くもってきてください」と指示しつつ,「今はフリータイムじゃないのよ。静かにしなさい」と注意する。ほぼ全員が作品を提出したところで，「肩」「頭」「空」「頭」と指示をして，教室を静かにさせる。しかしながら，すぐに騒がしくなったので，今度は目をつぶって机に伏せるようにとの指示がある。するとみんな静かになる。

15時00分：

電子黒板の前に3人の児童が出てきて，モノあてゲームのようなことをする。そしてチャイムがなると，みんなは教室を出て，帰宅の準備をし始めた。帰りの会や帰りの挨拶はなく，学校時間が終わる。

授業後のインタビュー

Q：今日の授業の目的は何ですか？

A：オーストラリアの有名な画家であるプロ・ハートの絵をrecreate（自分の手で作り直す）ことによって，彼の作品appreciate（深く理解する）ことをねらいとしています。この画家特有の線や，質感などを学べるといいと考えています。Recreateではあるけれど，コピーをするわけではなくて，彼ら独自の絵が描けるといいと思います。あと子ども達が楽しんで絵を描くことができればよいと思っています。でも私もこういう指導でいいのか，ちょっと自信がないところもあります。

Q：このプロ・ハートの絵を題材にした理由は何ですか？

A：オーストラリアで最も有名な画家のひとりであるし，彼が題材にしているのは虫や動植物などの自然界のものです。このクラスでは，環境について学んできたので，題材として適していると考えました。

Q：ヴィジュアルアーツは週に何時間ありますか？

A：ヴィジュアルアーツとしては金曜日午後の1時間だけですけれど，他の教科のなかにも，絵を描いたり，色を付けたり，というヴィジュアルアーツ的な活動はたくさん取り入れられています。

### ⑵　B小学校におけるヴィジュアルアーツの授業

日時：8月21日（木）13時10分～14時15分，
　　および8月22日（金）9時15分～9時30分

場所：B小学校　Kクラス[16)]

教科：Visual Arts（図画工作）

教師：担任の教諭　50代後半のベテラン女性教諭

13時10分：
前の時間に使ったワークシートは先生に提出し，児童は机の上を片付けている。作業が早く終わった児童が読んで待っているための本が机に何冊か置いてあり，先生はそれを自分のケースのなかにしまうように指示する。まだ提出されていないワークシートが机に置いてあることを指摘し，児童が自分で提出するよう促す。机の上がきれいになったら，児童は先生の椅子の周りに集まり，カーペットの上に座る。
先生：「今日はひとりひとつずつダッファデル（Daffodil黄色水仙）を作ります。この紙をよく見てください。ここにダッファデルが描いてありますね。これを黄色とオレンジのクレヨンを使って塗っていきます。先生が少しやってみるので見ていてくださいね。」
先生は塗残しのある見本を作り，児童に見せる。
先生：「これはよい見本ですか？」
児童は「違う」という反応をする。
先生：「どうして良くないのですか？」児童数人が手をあげる。先生は指名する。
児童：「白いところが残っているからです。」
先生：「そうですね。白いところが残っているとよくありませんね。まず周りをきれいに縁取ってから中を塗るときれいに塗れますよ。今日は，黄色とオレンジのクレヨンしか使いません。ダッファデルのトレードカラーが黄色とオレンジだからです。周りの花びらを全部黄色に塗って，中心をオレンジで塗るのもいいですね。周りの花びらを黄色・オレンジ・黄色・オレンジというように順番に塗っていって，最後に中心をオレンジか黄色で塗るのでもいいですよ。もし周りをすべてオレンジに塗ったとしたら，中心は何色に塗るべきですか？」
児童：「黄色。」
先生：「そうですね。でもストライプに黄色とオレンジで塗る，というのはやめましょうね。それで表がきれいに塗れたら，今度は裏も塗ってください。」
先生は用紙を裏返して，少し考える。
先生：「表が塗り終わったら，先生のところに持ってきてくださいね。」
先生は窓のところに移動して，窓に用紙をあてる。すると表に塗った色が裏面まで透けて見える。
先生：「窓に透かすと，裏がよく見えますね。表が塗り終わったら先生のところに持ってきてください。そうしたら先生が裏にトレースしてあげます。先生が名前を呼んだ時だけ，来てくださいね。」
先生は実際に縁取りを描く。窓に表のクレヨンが移ってしまう。
先生：「あ，ちょっとクレヨンが窓に付いてしまいましたね。そして裏も表と同じようにきれいに塗ったら，線にそって花を切り取ります。それでは席に戻って作業を始めましょう。」
教室は5つの班からなっており，机は島になっている（写真8）。先生は班ごとにクレヨンの入った箱を配布する。児童は自分の席に戻る。先生は児童に1枚ずつ台紙を渡す。児童はクレヨンの箱から，黄色とオレンジのクレヨンを取り出し，塗り始める。先生は，机間巡視をしながら,「白い塗り残しがないように」「花びらと中心の色は同じにしないように」

**写真8**　教室の風景

といことを注意しながら，作業を進めさせていく。ある男児が，青や赤で塗っている。先生は「違うわ。それは黄色かオレンジ？」と児童に問いかけ，児童が「違います」と答えると,「申し訳ないけど, やり直し」といって新しい紙を渡す。特別な配慮を必要とする（と思われる）男児について，様子を見ながら適宜やり方を教えてあげるよう，周りの児童に伝える。またその男児がきれいにダッファデルを塗ることができていないので,「見て，ここに白が残っているでしょう？　こういう風に塗っていくときれいよ」と少し塗って見せて，あとは自分で塗れるようにクレヨンを渡す。ひとりの女児が花の一部を緑色に塗ってしまう。それを見た先生は,「あら，○○ちゃん。どうしてここを緑色に塗ってしまったの？　ダッファデルデーのトレードカラーはオレンジと黄色だから，この2色だけしか使ってはいけないと先生はいったでしょう」とかなり厳しく叱責する。しかしやり直しになることはない。しばらくすると表面が仕上がる児童が出てくる。「先生できました」と児童が用紙を持ってくると，先生は先ほどの窓に移動し，裏面にトレースをし，それを児童に渡す。しばらくすると裏面も仕上がる児童が出てくる。先生はラミネーターのスイッチを入れる。

先生：「両面を塗り終えたら，丁寧に線にそってはさみで切っていきます。白いところが残っていてはいけませんよ。それから，はさみの使い方を思い出して。はさみを動かすのではなく，紙を動かすようにね。きれいにはさみで切れたら，裏に自分の名前を書きます。それを先生のところに持って来たら，先生はラミネートをかけてあ

げますからね。」

この時点で，まだ片面が仕上がっていない児童が2〜3名いる。先生はその児童のところにいき，「先生が少し手伝ってあげましょうね」といって，クレヨンを持ち，まだ白い部分を塗ってあげる。花を切り取り終わった児童が先生に見せに来る。

先生：「ここに白いところがありますね。白いところが残っていてはいけませんよ。やり直していらっしゃい。」

きれいに仕上がった児童には，花の裏に名前を書くようにいう。先生はできあがった3枚の花をA4のラミネート用紙にはさみ，ラミネートをかける。

先生：「ラミネートをしてもらった人は，クレヨンをしまい，机の上をきれいにしたあと，自分の席で好きな本を読んで待っていてください。」

授業時間があと5分となる。先生は裏に名前の書いていない花もどんどんラミネートをかけていく。まだ終わっていない3人の作品は先生が預かる。次の時間は選択授業で児童がばらばらになるので，あとの作業（全部の花にラミネートを施し，そこから花を切り出す作業）は先生が行うようだ。

14：05

先生：「それではみなさん，一度，手を休めて，こちらに集まってください」

児童は先ほどのように先生の椅子の周りに集まり，床に腰を下ろす。一番早く終わった児童の作品を手に取る。

先生：「ラミネートから花を切り出して……（机の上にあった黒いストローをひとつかみ取る），このストローをセロハンテープで留めると，ダッファデルのできあがりです。明日の朝会が終わったら，Kクラスの中庭にある花壇にこの花を挿しましょう。今日はまだ挿しません。」

児童：「なぜですか？」

先生：「今日挿したとしたら，夜のうちに何が起こる可能性がありますか？」

児童：「雨が降る。」

先生：「そう。雨が降ってダッファデルが壊れてしまうといけないので，明日挿します。明日は，ダッファデルデーですね。明日は“黄色いものを身に付けてこよう”“黄色いものを買おう”“黄色いもので学校を飾ろう”という活動をします。おうちに黄色いTシャツや洋服がある人は，ぜひ着てきてください。黄色の服がどうしてもない，という人は……（先生は手に黄色の毛糸を手に取り，子ども達に見えるように掲げる）先生が黄色の毛糸を準備してありますから，これをブレスレットのように腕に付けましょう。明日のために黄色い服を買う必要はありませんからね。そして“黄色いものを買おう”ですけれど，これはお小遣いを持ってきて，この黄色いバッジ[17]を買うというものです。ゴールドコイン[18]を持ってきてくださいね。これで集まったお金は癌で苦しんでいる人たちを救うために使われます。そして“黄色いもので学校を飾ろう”ということで，みなさんは今，このダッファデルを作っているわけですね。明日，朝会のあとに，これを花壇に挿して，飾りましょうね。さて，先ほど癌で苦しんでいる人，といいましたけれど，癌は身近な病気です。この学校にもこの病気と闘っているお友達がいること，みなさんは知っているでしょう？　外にはってあるポスターの男の子です。今日，家に帰ったら，お父さんやお

**写真9**　完成したダッファデル

**写真10**　ポスター

母さんに知り合いで癌になった人はいますか？と聞いてみてごらんなさい。きっとあなたたちのおじいさんやおばあさんにもこの病気と闘ったことのある人がいるかもしれません。」

子どもから「癌になると死んでしまいますか？」という質問が出る。

先生：「今は医療が進歩したので治る人も大勢います。でも残念ながら亡くなる方もいらっしゃいます。先生の知り合いにも癌と闘ったことのある人がいます。日本からのお客様にも聞いてみましょう。日本にも癌という病気はありますか？」

私たち：「はい」

先生：「このように癌という病気は身近な病気です。この病気になった人たちを支援するのがダッファデルデーです。それでは，女の子から静かに外に出ましょう。」

授業終了時刻（14時15分）となり，子ども達は教室から出て行った。

授業後のインタビュー

今年のダッファデルデーのポスター（写真10）になっている男の子は，B小学校に在籍している男の子で，現在，脳腫瘍と闘っていることから，B小学校ではこの活動に力を入れている。明日は，「黄色いものを身に付けてこよう」「黄色いものを買おう」「黄色いもので学校を飾ろう」の3つ合言葉で，全校をあげてダッファデルデーに取り組む。このクラスでは，集会のあと，校庭にある小さな花壇に，ひとりひとりが作ったダッファデルを挿して，花壇をダッファデルでいっぱいにする計画だという。そのため，先生は「今日はあまり創造的ではない活動なんですけれど……」と補足していた。

翌日（8月22日）

9：25　朝会のため，児童が外に集まり，先生の話を聞く。

朝会が終わると，Kクラスの先生は，昨日作成したダッファデルを児童に手渡し，自分で花壇のところまで持って行くようにと伝える。列になって花壇の前に到着すると，先生は「花壇全体にきれいなダッファデルが咲くように，挿しましょう」といい，児童は花壇の好きな場所に花を挿した。全員が挿し終わると，先生は「上級生が作ったダッファデルも

挿したい子は，ここにありますから，挿していいですよ」と声をかけ，数名の児童が先生にダッファデルをもらって挿す（写真8の中央部分に見える立体的な花が，上級生によって作成された花である）。すべて挿し終えると，先生は「きれいな花壇になりましたね。では，教室に戻りましょう」といい，全員教室に入っていった。

## 3. 参観した2つのヴィジュアルアーツの授業の特徴

A小学校で参観した授業では，オーストラリアで最も著名な芸術家であるプロ・ハートの代表的作品である「トンボ」を模写することで，2つの目的を達成しようとしていた。①スポンジペインティングという技法を用いて紙を着色し，描きたいものを黒色でトレースし，さらに対照色のクレヨンで着色し，最後の仕上げにインクでニュアンスを出す，という児童にとっては新しい絵画技法を習得させること。②オーストラリアを代表するプロ・ハートの芸術に触れ，鑑賞し，実際に模写することでより深く理解すること。一方で，教師は「小学校のヴィジュアルアーツの授業は，もっと主体的で創造的であるべきだ」という思いもあり，模写を指示しながら，「ひとりひとりのトンボは違っていて素晴らしい」という矛盾したメッセージを発することになっていた。また，これまでクラスで取り組んできた環境に関する学習と関連づけるために，「トンボ」を題材としたと述べられているものの，子ども達の描いたトンボやアリは実物とは異なり，4本足のアリや，2つの節からなるアリなどが頻出していた。教師が見本を示し，やり方の道筋をきちんと示しているために，ほとんどの児童は混乱なく作業に取り組めていたが，多くの児童は，自分の作業が「正しく進んでいるか」を教師に確認していたことが印象的である。

B小学校で参観した授業では，明日のダッファデルデーのためにダッファデルを作ることが目指され，台紙に描かれた花を指定された色で塗り，はさみを使って正しく切り出す，という授業であった。花びらの塗り方は4通りが示され，児童が想像力を働かせたり，工夫したりする余地のない授業である。先生は，「これは明日の準備のための特別な授業である」ということを強調し，「創造的ではない」ということに言及していたことから，やはりB小学校の教師も小学校のヴィジュアルアーツの授業は，もっと主体的で創造的であるべきだという思いがあるのだろう。教室には，オーストラリアの大切な記念日であるアンザックデー[19]に関連して作った「兵士の絵」が掲示されており，アンザックデーやダッファデルデーという特別な日について理解するために，ヴィジュアルアーツにおいてそれらをモチーフにすることは一般的に行われているようである。

私たちが見学した2つの授業は，偶然にも，教師が「ヴィジュアルアーツはもっと主体的・創造的であるべきだ」という思いを抱えながらも，教師主導で，やり方の筋道をきちんと示し，多くの児童が迷わずに，ある一定水準以上の作品を作り出すことができるように水路づけられた「作品主義[20]的」授業であった。実際に，A小学校のプロ・ハートの模写の作品は，スポンジペインティングを施された美しい紙に描かれ，最後に薄く溶いたインクでニュアンスが加えられ，できあがった作品はかなり素敵に見えた。B小学校のダッファデル作りも，朝会のあと，全員の花が中庭に挿された光景は華やかで美しいものであった。しかし，この2つの授業を通して，児童は何を学んだのだろう。「正しく作品を作る方法」「先生の指示通りに行動する力」であり，本来のヴィジュアルアーツの在り方

からは外れているのではないだろうか。また，教師は「ヴィジュアルアーツでは子ども達の主体性や創造性を伸ばすような活動を行いたい」という願いを持つのに，なかなかそのような授業が成立しないのは，なぜなのだろうか。

## おわりに

見学後の私たちの素朴な感想は，「オーストラリアと日本では，造形領域の目標や方法に違いがみられるのに，実際に行われている授業はあまり変わらないのはなぜなのだろう」というものであった。本稿の巻末の資料に，今年6月に名古屋市内の公立小学校で参観した図画工作の授業の観察記録を掲載した。この授業は，保護者が児童の学校生活の様子を参観できる学校開放デー（いわゆる授業参観日）に行われた授業で，授業者は新任教員であり，いわゆる典型的な「作品主義」の授業となっていた。この授業を参考にしながら，造形領域の目標や方法が異なっていても，オーストラリアと日本で，同じような作品主義的な授業に陥りがちな事情について考えてみたい。教師は，2つの環境的制約のもとでヴィジュアルアーツあるいは図画工作の授業を行っている。第1に，創造力に欠ける児童も，作業の遅い児童も，落ち着きのない児童も，全員が混乱なく作業に取り組めるような授業にしなければならない。すなわち「授業運営のコントロール」を求められるという環境的制約である。これは授業参観という特殊な環境で進められた日本の事例によく見られた特徴である。そして第2に，週に1〜2時間しかないヴィジュアルアーツあるいは図画工作の授業において，ある程度，鑑賞に堪えうる水準の作品を生み出さなければならないという時間的制約条件である。さらに作品の出来は，授業の質を示すものであり，教師の指導力をも示すものになりうる。この2つの環境的制約条件のもとで，教師が戦略的に採る方法として，「見栄えのよい作品になるような作業目標を立てる」「手本を示す」「作業の道筋をきちんと示す」ということが行われる。こうして，教師主導の作品主義的な授業に陥っていくのである。オーストラリアにおいても日本においても，このような作品主義的な授業が共通してみられるのは，授業者を制約する条件が両国において類似しているからではないか，というのが私たちの仮説である。

**【謝辞】**

本研究を行ううえで，授業参観にご協力いただきました，A小学校・B小学校・C小学校の先生方と児童のみなさんに心より感謝申し上げます。また，図画工作･美術科の国際比較のレビューを行ううえでは，磯部錦司先生（椙山女学園大学教育学部教授）に多くの助言をいただきました。ここに記し，感謝申し上げます。

## 【参考文献・註】

1）「保育所保育指針」は厚生労働省管轄下の「保育所」の指導要領である。平成20年（2008年）に改訂された。以下のサイトにて閲覧可能である。（2014年9月10日接続確認）http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku04/pdf/hoiku04b.pdf

2）「幼稚園教育要領」は文部科学省管轄下の「幼稚園」の指導要領である。平成20年（2008年）

に改訂された。以下のサイトにて閲覧可能である。（2014年9月10日接続確認）http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/you.pdf

3）オーストラリアでは現在，国家レベルの保育・教育の基準の整備が進められており，就学前の幼児対象の基準が2009年に制定された。以下のサイトにて閲覧可能である。（2014年9月10日接続確認）http://docs.education.gov.au/system/files/doc/other/belonging_being_and_becoming_the_early_years_learning_framework_for_australia.pdf

4）日本の学習指導要領は，平成20年（2008年）に改訂された。以下のサイトにて閲覧可能である。（2014年9月10日接続確認）http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/index.htm

5）オーストラリアでは1994年から国家カリキュラムが定められてきたが，各州や直轄区が独自のカリキュラムを定めるうえで参考にする程度で，実際には州ごとに定められたカリキュラムの基準が用いられてきた。しかし2008年から「国家統一カリキュラム」の準備がはじめられ，2014年からはすべての州において，このカリキュラムに基づく実践が行われることになった。芸術領域の基準は以下のサイトにて閲覧可能である。（2014年9月10日接続確認）http://www.acara.edu.au/verve/_resources/Shape_of_the_Australian_Curriculum_The_Arts_-_Compressed.pdf

6）森文乃・山田真紀「造形領域における日本とオーストラリアの学習指導要領の比較―幼児期と学童期に着目して―」椙山女学園大学『教育学部紀要』第8号，2015年（印刷中）。

7）イギリスを対象とした研究の例。直江俊雄「英国の中等教育における美術カリキュラムの編成・実施動向：イングランド中西部の学校における調査から（1994年・2010年）」筑波大学『芸術研究報』第34号，13−22頁，2013年。阿部靖子「イングランドの小学校における美術教育と環境造形学習」『上越教育大学研究紀要』第25号，第一巻，185−198頁，2005年。アメリカを対象とした研究の例。ふじえみつる「美術教育のカリキュラムに関する研究―アメリカの美術教科書における「領域」の分析を通して」『美術教育研究』第9号，68−84頁，2003年。ドイツを対象とした研究の例。鈴木幹雄「現代ドイツ芸術教育学成立期にみる芸術教育学の表層面と実際：1960年代芸術教育学はいかに創られたのか，我々はそこからどのような芸術教育学的理解を学ぶことができるのか」『美術科教育学会誌』第35号，305−314頁，2014年。韓国を対象とした研究の例。千凡晋「韓国と日本における“美術科”学習指導要領の比較研究：韓国の第1次教育課程と日本の昭和26年版学習指導要領を中心として」『美術科教育学会誌』第28号，263−274頁，2007年。台湾を対象とした研究の例。王文純「中学校の美術鑑賞カリキュラムに関する日本・台湾の比較研究一基礎調査（1）」『美術科教育学会誌』第13号，219−228頁，1991年。蔡惠真「台湾の新しい小学校教育における“郷土美術”について」『美術科教育学会誌』第19号，143−155頁，1998年。

8）直江俊雄，前掲論文，13頁。

9）ふじえみつる，前掲論文，69頁。

10）阿部靖子，前掲論文，187頁。

11）第1学年及び第2学年の「2内容」「A表現」（1）イ

12）第1学年及び第2学年の「2内容」「A表現」（2）ア

13）オーストラリアの国家基準のvisual artsの領域における3・4学年の欄に以下のような記載がある。「伝統文化や大衆文化についての学びを通して，生徒は，視覚的・審美的理解を深め，視覚文化におけるコード，シンボル，意味に気づくようになる。彼らの社会のなかでのアート・工作・デザインの位置や機能について話し合う。」詳しくは森・山田前掲論文参照のこと。

14）オーストラリアの小学校では，教師に「対面的教授からの解放時間relief face to face」という時間が週に2時間ずつ与えられ，その時間はcasual teacherと呼ばれる非常勤の先生が授業を担当する。このクラスのクラス担任は，現在，副校長を兼任しているため，通常よりも多くの

relief face to faceの時間を持っている。

15）先生は「トンボがアリを食べている」と強調していたが，プロ・ハートは他の作品でも死んだトンボがアリに食べられている様子を描いているので，子どもの指摘が正しかったと思われる。しかしながら諸外国では,「トンボがアリを食する」ということが一般常識となっている。参考：http://www.dragonfly-site.com/what-do-dragonflies-eat.html

16）KクラスとはKindergartenクラスの略称であり，小学校の最初の学年，いわゆる「準備級」である。NSW州においては，児童の年齢は日本の幼稚園の年長児とほぼ同じである。

17）写真10の少年が胸に付けている黄色いバッジ。この時期は街中で購入できる。

18）オーストラリアでは1ドルと2ドルがゴールドコインである。日本円で1ドルは約100円である。

19）ANZAC dayとは，毎年4月25日にあるオーストラリアの祝日。第一次世界大戦のガリポリの戦いで勇敢に戦ったオーストラリア・ニュージーランド軍団（ANZAC：Australia and New Zealand Army Corps）の兵士を追悼するための日である。第二次世界大戦後からは，オーストラリアのために戦争を戦ったすべての兵士を追悼する日となった。

20）教師主導で見栄えのよい作品を作らせる指導の在り方を総称する概念である。

## 【参考資料】

日本の図画工作の授業の観察記録
日時：平成26年6月28日（土）2時間目
場所：名古屋市立C小学校　2年2組
教科：図画工作（2時間続きの1時間目の授業）
教師：クラス担任　20代前半の新任教諭　女性

本日は学校開放デー（授業参観日）であるため，保護者が15名ほど，教室の背後から児童の学習の様子を見守っている。児童数は21名。教室の机の配置は，児童は黒板の方を向いて着席するというオーソドックスな形であり，2連続きになっている机が3列配置されている。2連続きの席には男女がペアになって座っている。

2時間目のチャイムがなる。児童全員が着席したのを確認し，教師は学習係に合図をする。学習係の男児と女児が「これから2時間目の勉強を始めます。礼！」と号令をかけると，児童は座ったまま礼をする。先生が教卓の前に立ち，話し始める。

先生：「今日は黒板にも書いたけれど，“楽しかったことを絵に描こう”ということをします。最初にみんなから，最近あった楽しかったことを発表してもらおうかな。この前，国語のノートに書いたことを参考にして……発表してくれる人！」

7人の手があがる。

先生:「それでは，今手をあげてくれた7人の子。発表してもらいます。その場に立ってくれる？」その場に立った児童が楽しかったことを発表していく。「プールに入ったこと」「生き物探しにいったこと」「中庭で遊んだこと」「イギリスにいったこと」「はまなこパルパルにいったこと」「おもちゃを買ってもらったこと」先生はそれを板書していく。

先生：「他に発表してくれる人はいますか？」

また7人の子が手をあげる。先ほど発表した3人も含まれている。同じようにその場に立って発表していく。これを3クールする。途中，「はまなこパルパルにいったこと」といった女児が「先生，はまなこじゃなくて，はなまこです！」と先生の間違いを指摘するが，先生が「はなまこじゃ

なくて，はまなこが正しいですよ」と返答する。

先生：「はい。たくさんの人が楽しかったことを発表してくれましたね。それでは，これから画用紙を配りますので，この楽しかった思い出を描いてみてください。その時に，守ってほしい4つのお約束があります。分かるかな？」

先生は4つのお約束を少しずつ黒板に書いて，内容をあてさせていく。児童は黒板の書かれたヒントをもとに，口々に自分の意見をいう。

黒板には，以下の「お約束」が書かれる。

えをかくとき

1　だいじなものを大きくかく

2　じぶんをかく

3　まわりのようすをかく

4　たくさん色をつかう

（くろ色はさいごにつかう）

先生：「それではみんなで一緒に読んでみましょう。」

児童と先生は，声をそろえて4つの約束を読み上げる。

先生：「教科書と筆箱は机のなかにしまい，机には，新聞の下敷きと，クレヨンだけを出してください。さあ，誰が一番，最初に準備できるかな。」

児童は競争のように机の準備をする。準備が完了した児童は挙手し，先生は挙手した児童を「確認できた」という趣旨で指差しをする。全員が準備できたことを確認し，先生は，列ごとに画用紙を配布する。児童は画用紙の束から1枚取って後ろにまわす。

先生：「それではクレヨンから黄土色のクレヨンだけを取り出してあとはしまってください。今日は，輪郭は黄土色だけを使って描きます。あ，そうだ。まずこれを見てください。先生が見本を描いてきました。さっき，ちょっともう見ちゃった子がいるんだけれど……。」

先生は，B4サイズのコピー用紙に，色鉛筆で描いた，「私がラーメンを食べている絵」を黒板にはる。絵は漫画っぽく，あまり上手とはいえないが，児童は興味津々に見ている。

先生：「この絵はみんなが新学期に一番好きな食べ物，としてあげてくれたものです。そう！ラーメン。先生は週末にラーメンを食べにいきました。おいしかったラーメンをどーんと真ん中に描いているでしょ。横にいるこの女の人が先生です。そして周りにはラーメンを食べに来た他のお客さんも描いています。先生は色鉛筆で色を付けたけれど，みんなはクレヨンと絵具で色を付けていきますね。あと，こっちも見てください。ちょっと小さすぎて，後ろの人は見えるかな？　みんなと同じくらいの子ども達が同じテーマで描いた絵です。これはカブトムシが真ん中に大きく描いてありますね。」

児童が描いた模範的な4枚の絵のコピーを黒板にはる。教科書か指導書にある絵をそのままカラーコピーしたもので，はがき大であるため，後ろからは絵の詳細までは見えない。

先生：「はい，それでは，描き始めましょう。今日，来てくれたお母さんと相談しながら描いてもいいですよ。」

保護者は自分の子どもの机の横にいき，中腰になる。

子ども達は描き始める。

観察者は一番後ろに座っていた男児とその母親のやり取りを見ていた。その男児はロンドンにいった時のことを描くという。男児は「何があったっけ。忘れちゃった。何をやったかママいってみて」と傍らにいる母親に聞く。母親は「ロンドン動物園にもいったし，いとこたちに会ってパーティもしたよね。高級ホテルにランチにもいったし，ロンドンバスにもたくさん乗ったね」と答える。男児は「じゃあ，動物園にしよっと」という。母親が「動物園では何を見た？」と聞くと，男児は「ゾウとライオン」と答えたが，母親は「ゾウとライオンはいなかったでしょ。キリンと

かゴリラはいたけれど」と答える。男児は, 画用紙の隅に小さくキリンを描く。母親は「え〜, もっと大きく描かなきゃ。先生がいったでしょ？　キリンは首と足がなが〜いよ。」男児は気が進まなさそうにちょっと足を描きたす。さらに母親は「誰といったんだっけ？　おばあちゃんもいたよね。先生が周りに自分といた人を描いてねっていったでしょ」と促す。男児は面倒くさそうに人物を3人描く。
女児が「先生，〇〇クン，黒のクレヨン使っちゃったよ」と指摘する。すると先生は「今日は黄土色だけを使うっていったでしょ。黒のクレヨンはしまっておいてください」という。またある男児は「先生，プールの水は黄土色じゃなくて水色でいいですか」と聞く。先生は,「う〜ん」と少し考え,「水が黄土色だったら，おかしいか。じゃあ，水色でもいいですよ」と答える。
しばらく先生は机間巡視をする。そのあと，先生は給食配膳台の上に新聞紙をひき，絵具の準備をし始める。早々と下描きを終えた児童は容器に絵具を入れたり，絵筆洗いの容器に水を入れたりして, 準備を手伝う。準備が整うと, 下描きが終わった児童から, 教室前方にある教卓や机を使って，絵具で色を付け始める。椅子がないので，立って色を付けていく。
2時間目終了のチャイムがなる。先生は,「それでは3時間目に続きをやります。一度，ここで2時間目を終わりにしましょう。学習係さん，号令をお願いします」と声をかける。
学習係が「気を付け！」と号令をかけ，全員で「礼」をする。そのあと児童は絵の続きをしたり，トイレに向けて教室を走り出たりしていく。

以上